

エスニック移民から考える社会統合——「日本人」と「外国人」のはざま

熊本保健科学大学

保健科学部

伊吹 唯

要旨

本稿は、日系ブラジル人をエスニック移民の視点から分析することで、日本社会への移民の統合について再検討するものである。既存の日系ブラジル人研究の多くが、日系ブラジル人を「ブラジル人」として扱ってきた。しかしながら、エスニシティの複層性と移動の連続性というエスニック移民としての側面から日系ブラジル人の事例を検討することで、「日本人」、「日系人」としての「誇り」、「日本人性」を主張することによる日本社会に対する「抵抗」、日本社会からの期待の「受容」の語りが見られた。そのなかでは、「日本人性」や「ブラジル人性」の主張が戦術的な手段として用いられていることが明らかになる。このことは、「多文化共生」を目指すべきゴールとして位置づけるのではなく、あくまでも手段として見ることで、文化をめぐる議論だけに終始しない、社会統合の形を論じることができる可能性を示唆している。

キーワード：エスニック移民、日系ブラジル人、社会統合、生活戦術、手段

1. はじめに

本稿は、日系ブラジル人をエスニック移民の視点から分析することで、日本社会への移民の統合について再検討するものである。エスニック移民とは、自国社会のマジョリティの人々とのエスニックな近似性が高い移民のことであり、国民国家は、こうした人々を移民として受け入れる傾向にある (Joppke 2005, ix)。日本社会におけるエスニック移民とは、1980年代以降に日本社会に流入した中国帰国者や1990年代以降に急増した日系ブラジル人を中心とする日系人である (梶田・丹野・樋口 2005, 121-3、蘭 2009, (35))。

後発移民国¹ (以下、後発国) の1つといわれる日本社会において社会統合モデルとされる「多文化共生」の起源は、1970年代の在日朝鮮人の人権闘争と1990年代のいわゆるニ

¹ 後発移民国が意味するところについては、本特集の趣旨説明を参照。

ユーカマーの増加にあったといわれている（山脇 2009, 33）。そのうち、後者の時期に急増したのが、日系ブラジル人であった。すでに日本国内で就労していた日本国籍を持つ日系一世、二世や、「日本人の配偶者等」の滞在資格で在留していた日系二世に加え、1990年の入国管理及び難民認定法（以下、入管法）改正を契機として新たに創設された「定住者」ビザにより日系二世、三世も入国してくることになり、日系人の数は急増した（梶田・丹野・樋口 2005, 110-113）²。さらに、2018年の入管法改正により、18歳以上30歳未満の四世も、一定の条件を満たすことで、活動の制限もなく最長5年滞在できるようになった（朝日新聞 2018.03.30）³。

しかし、梶田・丹野・樋口によれば、日系人は元々、労働力需要を満たすことを目的として受け入れられたわけではなかった。この時の入管法の改正は、日系人が、日本に暮らす親族の訪問や日本社会での生活を経験できるように入国と滞在を許可し、その滞在中の就労を可能にするという趣旨のものであった。そのため、日系三世や配偶者の急激な増加は「意図せざる結果」（梶田・丹野・樋口 2005, 119）だったともいわれている（梶田・丹野・樋口 2005, 114-9）。このように、日系ブラジル人の日本入国、滞在は、かれらがエスニック移民であること、すなわち、「日本人」の子孫であることを根拠として許可されてきた。

しかしながら、来日後、日系ブラジル人の多くは、「外国人」、「ブラジル人」として見られてきた。すなわち、入国、滞在許可の段階では「日本人」であることが意味を持っていたのに対し、その後の社会統合過程においては、かれらは「外国人」、「ブラジル人」とされてきたのである。これは日本社会だけではなく、日系ブラジル人研究者のなかでも主流の見方である。では、かれらの社会統合の過程においては「日本人」の子孫である、つまり、エスニック移民であることは意味を持たないのか。これが、本稿の問題意識の出発点である。

以下では、まず、先行研究の整理から、日系ブラジル人研究における日系ブラジル人に対する見方を整理し、エスニック移民としてかれらを見るための視点を示す。そして、事例として、ある日系ブラジル人三世の男性 A さんのライフストーリーを紹介し、そこから彼が日本社会との関係のなかで自らのエスニシティをどのように提示したり、戦術的に利用したりするのかを見ていく。最後に、A さんの事例から、エスニック移民の社会統合から日本社会における移民の社会統合に対して得られる示唆を述べて結論とする。

2. 研究の枠組み

2.1 日系ブラジル人研究における日系ブラジル人へのまなざし

² 入管法改正による日系ブラジル人の急増が可能になったのは、戦後ブラジル移民の一世が、デカセギの斡旋を担うようになっており、日本国内の各地でデカセギ斡旋ビジネスの基礎がすでにできていたためであるとも指摘されている（梶田・丹野・樋口 2005, 4-7）。

³ ただし、この条件で実際にビザが出されたのは、半年の間で2件のみだったという（岡田・鬼原 2018）。

日系ブラジル人研究においては、日本社会に生活する日系ブラジル人をエスニック移民ではなく「ブラジル人」として捉える研究が主である。例えば、日系ブラジル人についての代表的研究である『顔の見えない定住化』では、日系ブラジル人の日系人エスニシティは、日本滞在を可能にするものとして「道具」的に機能している一方、世代交代や日系人以外との結婚の増加により、日常生活における実態は「ブラジル人」化しているため、日常生活のレベルでは「日系人」というエスニシティが虚構化していることを、Brubakerによるドイツへのエスニック移民を事例とした議論を援用して論じている(梶田・丹野・樋口 2005, 114-30)。その前後に発表された日系ブラジル人研究においても、日系ブラジル人は「外国人住民」や「ブラジル人」として扱われている(例えば、都築 1998, 2009a, 2009b, 山本 2010)。また、いわゆる「リーマンショック」後の研究では、経済危機が日系ブラジル人を中心とした日系人に与えた影響に注目が集まった。それらの研究においては、かれらが「外国人」労働者であるために陥っていた不安定な雇用状況が明らかにされた(例えば、樋口 2010)。すなわち、日本社会において日系ブラジル人が「外国人」、「ブラジル人」として扱われてきたことを反映して、日系ブラジル人研究もかれらの「日系性」を後景化してきたことが指摘できる。

他方で、上掲の研究とは異なり、エスニック移民としての側面を強調して日系ブラジル人を論じたのが、Tsuda (2003, 2009) や三田 (2009) である。

なかでも、来日後の日系ブラジル人の日本社会への適応(adaptation)について詳細に論じているのは、Tsuda (2003) である。日系ブラジル人は、ブラジル社会において経済活動でも子弟教育でも成功しており、ブラジル社会のマジョリティの人々より社会経済的階層が高く、先進国である日本へのイメージもよい。こうしたことから、かれらはエスニック・マイノリティでありながら、ブラジル社会から肯定的に捉えられる“positive minority”である。すなわち、ブラジル社会において「日本人」、「日系人」であることはアドバンテージになるため、日系ブラジル人は、自分たちの「日本人性」をより強く意識するようになる(Tsuda 2003, 65-82)。にもかかわらず、来日後に、「デカセギ」であるということに対する偏見や文化的差異にもとづく差別により、社会経済的にも文化的立場においても下降移動するため“negative minority”になる(Tsuda 2003, 105-35)。この経験を経て、ブラジルにいる時に自分を「日本人」と認識していた日系ブラジル人は、来日後、日本人からの「ガイジン」というまなざし、自分のなかでも「日本人」との違いを感じることで、差別経験などにより日本に落胆すること、「日本人」がブラジルに対して持つネガティブなイメージを払しょくしたいと思うことから、ブラジルで持っていた日本人アイデンティティをブラジル・アイデンティティに転換するという(Tsuda 2003, 180-211)。そして、かれらは、日本社会に対する抵抗(resistance)としてブラジル文化を行動に取り入れていき、それによって日本社会からの同化圧力に抵抗することで、日本社会との関係性における精神的な負担を軽減している(Tsuda 2003, 270-87)。他方で、「日本におけるエスニックな抵抗を拒み、代わりに、より同化的な

マイノリティの適応の形をとる日系人」(Tsuda 2003, 323、筆者訳)もいるとし、こうした日系ブラジル人は日本文化にならって行動するが、結局、日本社会からの「同化圧力」に完全に合わせる事が難しく、また、ブラジル文化に沿って行動することにより日本社会に抵抗しようとする人々との間にも溝が生じる (Tsuda 2003, 323-39)。Tsuda は、ブラジル文化にならった行動をして日本社会に抵抗する人々と、日本社会に同化的な行動をとる人々を両極に位置づけ、実際の日系ブラジル人の行動はその両者のあいだのどこかに位置づけられると論じている (Tsuda 2003, 353)。

また、Tsuda は、様々なエスニック移民を事例として取り上げた編著のなかで、かれらの持つ移動の連続性に注目している。Tsuda の研究においては、エスニック移民をディアスポラ研究の延長で捉えており、ディアスポラ⁴の帰還のうち、一世の帰還を「帰還移民」、二世以降の帰還を「エスニック帰還移民」としている (Tsuda 2009, 1-11)⁵。この研究からは、ある社会から別の社会へ移民し、その本人や子孫が送出社会に戻ってくるという移動の連続性が、エスニック移民の特徴の1つとして論じられている。

日系ブラジル人の事例における移動の連続性や移動経験をより詳細に論じたのは文化人類学者の三田である。三田 (2009) では、近代日本からブラジルを含む各地への移民送出の経緯、ブラジルの移民政策の下での日本人移民の受け入れ過程から、移住地における生活や経済活動を概観し、その後、ブラジルから日本に向かった人々の、日本の地域社会における生活、教育、就労について明らかにしている。つまり、近代日本からブラジルへの出移民から、現代のブラジルから日本へのデカセギまでを一続きのものとして捉えた研究である。なかでも、サンパウロ州のバストス移住地における日系人の生活から、そこから送出されたデカセギの日本社会における生活までを追っている。バストス移住地においては、日本の文化や日本語が継承され、日本人は社会経済的ヒエラルキーにおいて非日系人よりも上位に立っているため「ジャポネス」であることが誇りとなってきたという。しかしながら、かれらは、来日後、日本語がわからないという経験をし、さらに「ガイジン」として扱われることで、「ジャポネス」と「日系ブラジル人」、「ブラジル人」というアイデンティティを戦術的に使い分けるようになる (三田 2009: 68-86, 209-39)。日本からブラジルへの移民から現在日本にいるブラジル移民までの人の移動のつながりに注目している点で、ディアスポラの子

⁴ 元来、ディアスポラは、一般的にはユダヤ人のように離散を余儀なくされた人々をさしていたが、Cohen はディアスポラのなかに、犠牲者 (victim) 以外にも、労働 (labour)、帝国 (imperial)、交易 (trade)、脱領土化 (deterritorialized) を含めている (Cohen 2008, 18、日本語訳は、駒井訳 2012 による)。Tsuda のディアスポラの定義も Cohen に依拠しており、犠牲者、労働、帝国ディアスポラの子孫の帰還を主な「エスニック帰還移民」として扱っている (Tsuda 2009, 9)。

⁵ Tsuda の用語法に従えば、本稿で扱う日系ブラジル人の多くが「エスニック帰還移民」にあたる。しかし、本稿は、「帰還」研究を主題とするものではなく、混乱を避けるために、あえて、「エスニック移民」という呼称を用いることとする。

孫による先祖の出身国への移動を指すエスニック移民として、日系ブラジル人を論じているといえるだろう。

2.2 調査・研究方法

以上のような先行研究を踏まえ、本稿では、日本社会への移民の統合をエスニック移民としての日系ブラジル人の視点から問い直すことを目的とする。その際に、上記の先行研究を参考に、エスニシティの複層性と移動の連続性に着目する。具体的には、日系ブラジル人の日本社会における生活のなかで、かれらの日系人エスニシティ、ブラジル人エスニシティ、移動の連続性がそれぞれどのような意味を持つのかという問いを設定した⁶。そして、移動経験の連続性とそのなかでの経験の継承をより具体的に明らかにするため、1人の日系ブラジル人に着目し、その人のファミリー・ヒストリーとライフストーリーを聞き取るという方法を用いることとした。

本稿では、筆者が2015年5月からこれまでにやってきた長野県飯田市におけるフィールドワークで集めたデータの一部を用いる。一連のフィールドワークは、年に2～3回、多い年には6回、1回あたり1日～7日飯田市に滞在し行ってきた。調査は、飯田市における移民の社会統合の状況を、特に移民の視点から明らかにすることを目的としており、インタビュー調査を中心に、参与観察や資料収集を行ってきた。インタビュー調査は、これまでに、移民10名、市役所の多文化共生施策関係者4名、日本人支援者2名に対し実施してきた。また、日本人支援者に対しては参与観察の場などにおいても聞き取りを行ってきた。

本稿では、このなかでも、日系ブラジル人三世の男性Aさん⁷を事例として扱う。Aさんは1970年にブラジルのサンパウロ州トゥパン市で生まれる。その後、サンパウロ州内で、カフェランジャ市、グワルーリョス市に暮らした後、1990年に来日する。来日後は、群馬県伊勢崎市、大泉町、静岡県富士吉田市を転々とし、2000年代前半から長野県飯田市に暮らしている。

Aさんは、飯田市においてブラジル人とホスト社会の間に入り、両者の関係性を調整する役割を担っている。そのことは、飯田市を中心に活動する日系ブラジル人団体Xの中心人物の1人としての彼の活動だけではなく、学校で日系ブラジル人の来歴を紹介したり、ポルトガル語教室を開催したりというところにも見ることができる。さらに、日本国内でも日系

⁶ 本研究は、日系ブラジル人が言語や文化、アイデンティティなどの面で「ブラジル人」である側面を持つことを否定するものでも、かれらの「日本人性」を過度に強調し、かれらがより「日本人」らしくなるように同化圧力をかけようとするものでもない。むしろ、日系ブラジル人のなかのエスニシティの複層性や多様性、移動性に目を向け、かれらを「ブラジル人」として見ているだけでは見落とされている側面に光を当てることで、従来とは異なるエスニック移民という視点から、日本社会による日系ブラジル人の受け入れのあり方に示唆を与えることを目的とするものである。

⁷ Aさんの母親はブラジルと日本の二重国籍だったため、Aさんは書類上では二世となっているそうだが、Aさんは自分自身を三世と呼ぶ。

ブラジル人集住地域を転々としてきた経験にもとづくネットワークに加え、移動領事館を飯田市内で開催できるよう働きかけ実現させたり、SNS 上で日系ブラジル人のグループの管理を行っていたりするなど、飯田市内だけに留まらないネットワークを持ち、そのなかで活躍する人物である。神奈川県川崎市鶴見区の日系ブラジル人の調査を行った広田は、仕事、生活全般に関わる相互扶助、福祉や娯楽の提供というエスニック・ネットワークのような機能を果たす人や施設を「繫留点」と呼び、ここに注目することで、日系ブラジル人の生活世界を明らかにすることができるとしている（広田 2003, 99-100）。以下で紹介するライフストーリーを通して明らかにできるように、Aさんは、このような「繫留点」としての役割を担う人であり、日系ブラジル人の生活世界に接近するために適した事例と考える。

表 1 : A さんに対する調査概要

調査日時	調査場所	調査方法	調査内容
2017年3月7日 9:00～12:40	筆者滞在先ホテル	ライフストーリー・インタビュー	飯田市のブラジル人の動向や日系ブラジル人団体Xの活動やその目的、意図など
2017年5月22日 8:00～13:00	下伊那郡、飯田市内各所	インタビュー	日系ブラジル人の工場などを訪問、見学
2017年8月5日 10:15～21:00	飯田市内イベント会場	参与観察	団体Xが参加する飯田市のイベントの観察
2017年8月6日 10:20～13:30	飯田市近郊 ブラジル人学校	参与観察	団体X主催チャリティーバザーの観察
2017年9月12日 10:00～16:00	飯田市内 レストラン	ライフストーリー・インタビュー	Aさんのライフストーリー
2018年8月4日 9:00～21:00	飯田市内イベント会場	参与観察	団体Xが参加する飯田市のイベントの観察
2018年12月11日 9:30～14:00	飯田市内	インタビュー	日系ブラジル人の経営するお菓子工場訪問、見学

筆者は、2017年3月から2018年12月にかけて7回にわたり、Aさんに調査に協力してもらってきた（表1）。そのうち2回はAさんの許可のもと、録音をしながらインタビューを行っており、本稿で扱うライフストーリーは主にそのなかで語られた内容である。録音したインタビューは、文字起こしをしてトランスクリプトを作成しており、本稿内でのインタ

ビュー・データはそのスクリプトから引用したものである。なお、インタビューの引用時には、なるべく発話されたままの形を残しているが、読みやすさを考慮し、発話内容が変わらない範囲で、言い間違いなどを修正している。また、[]内は筆者による補足である。1回目のインタビューではブラジル・コミュニティの中心人物の1人として、飯田市の日系ブラジル人の動向やAさんがリーダーを務める日系ブラジル人団体Xの活動やその目的、意図などについて主に聞き取った。2回目のインタビューでは、Aさん自身が生まれてからインタビュー時までのライフストーリーを語ってもらった。他の5回は、Aさんがリーダーを務める日系ブラジル人の団体Xによるチャリティーバザーや飯田市とその周辺（上伊那郡、下伊那郡）での日系ブラジル人による活動を紹介してもらった。

ライフストーリー分析に際しては、主に桜井によるライフストーリー論を参照する（例えば、桜井 2002, 桜井・小林 2005）。桜井らのライフストーリー論においては、インタビューは、語り手と聞き手の相互行為であるという考え方に立ち、語り手が「いかに語ったのか（how）」と「何を語ったのか（what）」の両方に着目して分析を行う（桜井 2002, 28）。そのため、本稿におけるインタビューの分析においては、Aさんが、日本社会における外国人住民について研究する「日本人」の大学院生である筆者（聞き手）に対して、このような語りをする意味は何かということ意識した分析を行う。具体的には、例えば、Aさんは、筆者とのインタビューの際にも、その背後にいる聴衆、つまり、日本社会を想定して語っていると考えられる。さらに、彼自身が、日系ブラジル人団体のリーダーであることから、日系ブラジル人を代表するような語りが見られることもある。

桜井らのライフストーリー論のもう1つの特徴は、モデル・ストーリーやマスター・ナラティブという概念を用いるなど、個人と社会との関係に分析射程を広げる点である（石川・西倉 2015, 7）。本稿では、Aさんの語りを実証主義的に検討するのではなく、個人的、社会的背景のなかにAさんの語りを位置づけながら、なぜAさんがこのような語りをするのか、Aさんがこのように語ることにどのような意味があるのかという点に着目して分析を進める。特に、来日後に「ブラジル人」「外国人」として扱われたにもかかわらず、なぜAさんは、先行研究の指摘とは異なり、自分は「日本人」であるという語りもするのかという点に着目し、このような語りが形成される個人的、社会的背景を明らかにする。自分のことを「日本人」だと強く主張するAさんの語りを分析することで、「日本人」であり「ブラジル人」でもあるエスニック移民の視点から、日本社会への移民の統合について示唆を得たい。

3. ライフストーリー

3.1 「日本人」としてのブラジルでの生活

まずは、Aさんの幼少期の経験から見ていく。Aさんの父親は養鶏業を営み、卵を売って生計を立てていたが、その売り上げが好調だったため、Aさんが5歳くらいの時に、トゥパン市からカフェランジャ市に家族で引っ越した。カフェランジャ市は、民間人による最初の

植民地の1つとして有名な平野植民地があった地域（ニッケイ新聞 2005. 7. 5.）である。カフェランジャでは、Aさんは日本人会館に通っていた。

A：日本人会館。その日本人会館やとったことは、やっぱり運動会、一番思い出すが運動会。（中略）あとは、お盆のお盆どり [=盆踊り]。（中略）そしたら、なんか日本の縁がすごい強かった。（中略）日本人会館のやとったことは、日本の文化の紹介。（中略）私は、柔道と野球やとった。⁸

ブラジル社会にいながらも「日本の縁」を強く感じていたと語るAさんは、他にもこのような日本人会館における活動、そして日系人コミュニティでの活動に度々言及している。例えば、日系人ばかりの野球チームはブラジル大会に出るほど盛んに活動していたという話や、柔道も習っていたがブルース・リーが好きだったので空手の方が好きだったという語りも見られた。

さらに、14、5歳当時、サンパウロ市に暮らしていたAさんは、父親に働きに出されたが、その時も日系人コミュニティのネットワークを通じて仕事を手にしたという。かれが最初に働いたのは、フェイラ（移動市場）関係の税理士事務所で、その次は銀行で働いていた。これらの職場はどちらも従業員の9割が日系人だった。加えて、銀行の入社試験では筆記試験が全くできなかったが、日系社会の人々が「なぜAさんを雇わないのか」と銀行側に働きかけたため、結局Aさんはもう1度チャンスを与えられ、そこに就職することとなった⁹。

このような語りは、ブラジルで暮らしていた時の日系人とのつながりを示すための語りとして機能している。これ以外にも、Aさんのブラジルでの生活についての語りは、自分が日系人としてどのように生活してきたかという内容が中心である。Aさんは、後述するように、国際交流イベントにおいてはブラジル文化を紹介しているし、筆者に対しても、ブラジルの食文化などについて紹介してくれた¹⁰ように、ブラジル社会のなかで、いわゆる「ブラジル人」らしい生活を送り、ブラジル文化も身につけてきたはずである。しかしながら、自分自身のブラジルでの生活についての語りのなかではそうした内容については語られない。こうしたことから、Aさんは、自分がブラジル社会において、日系ブラジル人同士の強固なネットワークのなかで、そのメンバーの一員として生きてきたことを語ろうとしていると考えられる。

もう1つAさんの幼少期の経験の語りのなかで重要なものは、Aさんの父親による教え

⁸ 2017年9月12日インタビュー

⁹ 2017年9月12日インタビュー

¹⁰ 2017年5月22日フィールドノート、2018年12月11日フィールドノートより

である。例えば、Aさんが8、9歳の頃、同じく日系人の友人とお小遣いを稼ぐために「ブラジル人」の靴磨きに行ったことがあったという。そのことを知った父親から、Aさんは以下のように叱られたと語っている。

A: 向こうのブラジルの人と絶対こういうこと許さない。っていうのね、差別、近いの、向こう [=ブラジル] の人と負けちゃだめ。その下はダメ。汚い靴で、お前手出したの
かって。(中略) 絶対こんなことしないで [と父親に言われた]。¹¹

ここでは、Aさんは、父親から「ブラジル人」と比べて「日本人」が見下されたり、下に位置づけられたりすることがないようにと教えられていたことを語っている。また、グワルーリョス市に移動するとAさんは日系人の少ない学校に通うようになり、いじめられるようになった。そのせいでけんかになったときには、以下のように父親から言われたという。

A: それ [=いじめ] 受けるか、強くするかどっち。私強い方が選んだ。ていうのは、けんか。週2、3回けんか。そしたら、うちの父何回、校長先生呼ばれた。またけんかよ、またけんか。「どういうことでけんか?」「これ、だから、日本人の(?)」「あー、じゃあいいよ。」 [と父親に言われた]¹²

このなかでは、「日本人」であるためにいじめられたのであればけんかしてもよいと、父親が認めていたとAさんは語っている。

以上2つの語りからは、Aさんは、父親が彼に対して、ブラジル社会のなかで「日本人」であることで差別されたり、見下されたりすることがないように、むしろそのことに誇りを持って生きるように教えていたと語っている。

Aさんが語るような日系ブラジル人同士の強固な関係性や、「日本人」として誇りをもって生きていくことは、ブラジル各地に存在する日本人会が目指していたことでもある。Aさんが活動に参加していた日本人会館とは、ブラジル各地に存在した日本人会の会館で、元々は「日本人入植地に設けられた日本人のための“場”であり、日本人結合の中心機関であった」(移民八〇年史編纂委員会 1991, 669) という。このような日本人会は、1970年代までは、日系人同士の交流と相互扶助のためのものであったが、1970年代以降、二世がその運営の中心になると、一世が持ってきた伝統は維持しつつも、文化、スポーツ活動などをメインに据え、非日系人も取り込んだ活動を展開するようになっている(移民八〇年史編纂委員会 1991, 670)。各地の日本人会をまとめる中央組織的な役割を担っていたのは1955年に発足

¹¹ 2017年9月12日インタビュー

¹² 2017年9月12日インタビュー

したサンパウロ日本文化協会（1968 年以降は、ブラジル日本文化協会）であり、その目的は、以下の 5 つであった。

- ①在伯同胞の相互親睦と文化的地位の向上を目指しての啓蒙運動
- ②日系コロニアの後継者たる二世の育英事業
- ③戦前、戦中、ブラジル国民が持っていた日本に対する誤解と偏見を除去するための積極的日本文化紹介、日伯文化交流事業の促進強化
- ④在伯同胞の利益擁護のため、日系コロニアの代表機関として、日伯両政府への折衝
- ⑤それらの事業を推進する中心機関、拠点となる文化センターの建設（移民八〇年史編纂委員会 1991, 647）

つまり、サンパウロ日本文化協会や各地の日本人会においては、日本文化の継承と日系人同士の絆の形成が重要なものとして位置づけられてきており、A さんの父親や A さんも、こうした意識を持って生活してきたことが語られている。

これら一連の語りは、A さんが、自分が「日本人」、「日系人」であることについて示す「誇り」の語りであるということが出来る。A さんの語りのなかでは、ブラジルでの生活において、自分が「日本人」の文化に親しみ、「日系人」ネットワークのなかで生活し、自分を「日本人」だと思って過ごしてきた様子が語られた。こうした語りからは、A さんが、自分が「日本人」であることに対する「誇り」を示そうとしていることが読み取れる。そして、A さんによって「誇り」の語りがなされる背景には、Tsuda が指摘したように、ブラジル社会において日系人が“positive minority”とみなされていたことがあるだろう。つまり、日系人に対して肯定的な評価がされているなかで、自分を「日本人」と認識していた A さんは、そのことに対する「誇り」を高めていったといえる。

この「誇り」の語りは、2 節で検討するような来日後の生活についての語りとは好対照をなしている。来日後の生活については、「ブラジル人」、「外国人」として日本社会から扱われることになったことが語りの中心を占めている。その意味では、A さんがブラジル社会において「日本人」らしく生活してきたと示すことは、来日後の生活との違いを強調する意味があると考えられる。

3.2 「ブラジル人」とまなざされた来日後の生活

A さんは、18 歳の時、当時勤めていた銀行で、日本に行けばお金をたくさん稼ぐことができるといわれ、当時入院していた母親のためにお金を稼いで何かしてあげたいという思いで、来日を決意したという。このような経緯で来日した A さんだが、降り立った空港で自分が「日本人」ではないことを思い知らされることになったと語っている。

A：成田空港で、まずは、[入国審査で] Japanese Only [の列に] 並んどった。（中略）

「ねえ、ここじゃないよ」「え、俺日本人じゃないの」と思って、初めて日本人じゃないと。「ああ、そっか。」ショックだった、ほんとショックだった。生まれてからずっと日本人、日本人、日本人。来たら日本人じゃ [ないといわれた]。 びっくりした。¹³

前節でも見てきたように、ブラジルにいた時の A さんは、父親から「日本人」アイデンティティを持つように育てられ、日本人会館で文化にも慣れ親しみ、自分のことを「日本人」であると思って生活してきた。しかしながら、国籍はブラジル籍であったため、「Japanese only」の列には並ぶことができないことを告げられ、A さんは、生まれて初めて自分が「日本人」ではないことを認識させられたと語るののである。先行研究が指摘するような、日系ブラジル人が来日後に「ブラジル人」と見られる経験を、A さんは空港での出来事を用いて語っており、A さんにとってこの出来事は、「日系人」から「ブラジル人」に変わる瞬間を象徴する事件という意味を持っている¹⁴。

このような空港における事件を経て、まず、A さんは、群馬県伊勢崎市内の工場で働き始めた。当時は、日本語も簡単な単語をわずかに知っている程度で、ほとんど話すことはできなかったという。この時には、会社の寮に暮らしていたそうだが、「ブラジル人」は「日本人」から嫌がらせや差別を受けていたと語っており、Tsuda が論じているような“negative minority”への変化を経験したことを訴えるような語りがされている。

A さんは、日常生活における自分たちに対する差別や不平等だけではなく、国籍のうえでも不条理さを感じていることを語っている。A さんによれば、来日時に 20 歳よりも若かったためすぐに日本国籍に入れるといわれたが、同時にブラジル国籍を失うことになるともいわれ、日本国籍取得を諦めたという。そして、なぜ日本では二重国籍は認められないのかと疑問を投げかける。

A : なんで二重国籍だめ。私の血は、これ 100%日本の血なんですよ。うちの父、向こうで生まれたけど、何で、ブラジル国籍入ったか。入ってもいい。向こうで生まれたから。(中略)だから、私、ほんとは日本人。国籍だけ違う。でも、おばあちゃん日本人、両方。おじいちゃん日本人。父も日本人、母も日本人、じゃあ日本人。娘も日本人。全部日本の血。(中略)でも、国籍問題だけじゃなくて、国籍変えても人間変えないじゃん、一緒じゃん。だから、国籍は別に、その、ね、入ってもいい状態だったら入れる。入りたいお願いします、やらない。お願いはしない。私の人間は見てもらいたい。この

¹³ 2017 年 9 月 12 日インタビュー

¹⁴ A さんはこの日のインタビューにおいて、この語り以降、日本社会での生活について語る際には自分を含めた日系ブラジル人のことを「ブラジル人」と呼び、ブラジルでの生活について語っていた際の「日系人」という呼称と区別している。

まま。そしたら入る。お願いしますって言わない。¹⁵

これは、Aさんが、自分が「日本人」であることと、それに対するプライドを強く主張している語りである。国籍法上では、日本国籍を選択した者に対して外国籍離脱の「努力義務」があるのみで、複数国籍を持つことに違法性はない（近藤 2017, 1）が、この語りにおいて重要なのは、Aさんが、自分は血筋的には「日本人」であるにもかかわらず日本国籍を得られないことの不条理さを訴えていることである。

Aさんは、入国の手続きにおいても、自分と「日本人」とのつながりを証明する必要があったはずである。日系人が日本滞在のビザを取得する際には、自分が日系人であることを証明できる書類、例えば、日系三世が定住者の資格を取得するためには、祖父または祖母の戸籍謄本、日系人である父親または母親の出生証明書、両親の婚姻証明書、申請者の出生証明書などが必要である（日系人相談センター 2019）。このような来日までの手続きを通して、Aさんは自分の血筋上の「日本人」とのつながりとそのつながりが自分の日本入国、滞在を可能にしたことを強く意識させられただろう。にもかかわらず、血統主義的にいえば「100%日本人」のはずの自分が日本国籍をもらえないのはなぜなのか。これが、この語りに込められたAさんの思いだろう。自分は血筋的には「100%日本人」であるため、お願いしてまで日本国籍をもらいたいとは思わないという語りからは、自分が「日本人」であることへの強い誇りと、国籍を持っていて然るべき「正当な」「日本人」であることの主張をうかがうことができる。

本節で見えてきたように、来日後に「ブラジル人」、「外国人」として扱われるようになったAさんは、そのことに対して、自分が血統的に「正当な」「日本人」であることを主張している。このような語りは、前節で見えてきたような「誇り」の語りであるとともに、「抵抗」の語りとしても見ることができる。

同様の「抵抗」の語りは、日系ブラジル人が飯田市内に増えていた時期に、Aさんが日系ブラジル人と地域社会の関係形成のために行っていた活動についての語りにも見られる。例えば、飯田市の夏祭りで行われる踊りの行列に、団体 X もかつて参加していたが、その際には、「看板持って、日本人の子孫です [ということを示した]。(中略) こういう人間ですよって紹介でずっとやってきた」¹⁶という。これは、日系ブラジル人が日本に暮らしていることを知ってもらい、日本人との懸け橋となることを目的とした団体 X の活動の一環だったという。また、飯田市内の公民館において、日系ブラジル人の紹介をする講演活動を行ったこともあるそうだが、その時にも、その紹介は「[日本からブラジルへの] 移民か

¹⁵ 2017年3月7日インタビュー

¹⁶ 2017年3月7日インタビュー

ら始まる。私まで」¹⁷ということ、自分たちが「日本人」の子孫であることを紹介していたという¹⁸。

さらに、このような祖先と自分たちのつながりを意識した語りは、Aさんが自分のファミリー・ストーリーを話すときにも見られる。Aさんの祖母は、東京で助産師の勉強をしていたが、労働運動に参加したことで、父親に戸籍から外されてしまう。そこで、彼女は、ちょうど満洲から引き揚げてきた男性と結婚し、ブラジルへ渡った。渡伯後も、彼女は日系社会のために活動し、日本舞踊を教えたり、ボランティアで助産師をしたりしていたとAさんは話している。そして、お金のためではなく人のために働いた祖母と同じように、自分の持っているものを人のために使いたいと語り、祖母を、ブラジル・コミュニティの中心人物としての自分の活動のロールモデルとしている。このように、自分の祖母が歩んだ道を引き合いに出しながら自分の活動を説明するということにも、自分と一世である祖母とのつながりを示すという語り方が用いられている。

さらに、Aさんは、ブラジル社会における日本人の経験と日本社会における日系ブラジル人の経験の類似性を指摘している。

A: 今からくる人間じゃなくて日本にいるブラジル人は、日本人と同じ。向こう、ブラジルにいた日本人と同じ。 大人でブラジルいった日本人たちは、ね、向こう 60 年住んでも、ポルトガル語覚えてなかったんですね。そしたら、向こうの文化慣れてなかったし。自分の文化全部で生活してた。私たちも同じなんですよね。¹⁹

ブラジルに渡った日本人の経験と日本に移動してきた日系ブラジル人の経験の重なる指摘にも、経験を受け継いでいることへの意識が見られる。さらに、ここでは、単に経験を継承しているということだけが語られているのではない。ブラジルの日系人は、“*Japões garantido*”、すなわち、「信頼できる日本人」と呼ばれている（小嶋 2005, 102）ように、ブラジル社会において、他のエスニック・マイノリティのロールモデルであるだけでなく、ブラジル社会全体にとってのモデルといわれてきた（Roth 2003, 114-5）。Aさんの上記の語りでは、日本社会の日系ブラジル人も、ブラジルで尊敬されている日系人のように社会上昇を果たす可能性があることが強調されている。

このように、Aさんが、自分たちと「日本人」である祖先とのつながりを強調する背景には、かれらがエスニック移民として受け入れられたことが関係している。「1.はじめに」でも言及したように、日系ブラジル人を中心とした日系人は、かれらが「日本人」の子孫であ

¹⁷ 2017年3月7日インタビュー

¹⁸ このような説明の仕方は、日本からブラジルへの移民 100 周年を記念して飯田市内で日系ブラジル人を中心に行われた劇にも見られた（JICA 駒ヶ根 2008）。

¹⁹ 2017年3月7日インタビュー

ることで、滞在許可や就労許可を与えられている。しかしながら、実際に来日した日系ブラジル人が、日本語を話すことができなかつたり、日本社会のルールや習慣を知らなかつたりするために、日本社会はかれらを「ブラジル人」、「外国人」と扱うようになった。それに対して、自分たちの祖先が「日本人」であり、自分たちも「日本人」なのでであると主張することは、単にかれらのアイデンティティの主張というだけではなく、かれらの滞在の正当性を日本社会に主張していると見ることができる。したがって、自分たちがいかに「日本人」的であるかを示すことは、そうした日本社会からのまなざしを跳ねのけ、自分たちに対する日本社会からの不条理な扱いに抵抗し、自分たちの存在の根拠や正当性を示す意味を持つだろう。

Tsuda の場合には、日系ブラジル人が、日本社会において、カウンター・アイデンティティとしてブラジル・アイデンティティを強くし、ブラジル文化に沿った行動をすることで、日本社会に対して抵抗する様子を描いていることは前述の通りである。しかしながら、A さんの事例からは、Tsuda が指摘するような日本社会への抵抗の形とは異なる抵抗の形が明らかになった。

3.3 ブラジル文化の表象

他方で、A さんの語りにおいては、ブラジルの文化もまた、自分たちの文化の一部として語られる。例えば、以下の語りは、A さんが団体 X の活動の 1 つとして国際交流イベントに参加することについてのものである。

A : それと団体 X やってるのは、国際 [交流] 関係。例えば、飯田の、飯田国際 [交流] 推進協会。そのイベント。その時は、私たちは誰ですかというブラジルの旗挙げて参加する。²⁰

この語りの通り、国際交流イベントに参加すると、団体 X はブラジルの旗を掲げ、中心的なメンバーたちはブラジルを想起させる黄色を基調にした団体 X の T シャツを着用し、ブラジル文化を紹介するブースを出している。世界各国の料理を配るコーナーでは、パステルやコシーニャなどのブラジル料理を提供している。そして、各国の人々が民族舞踊などを披露する時間には、かれらは南米の音楽に合わせてエクササイズをするズンバを披露する²¹。

このように国際交流イベントの時にかれらがブラジルのことを紹介するというのは、日本社会側から期待されたことでもある。飯田市では、年に 1 度、12 月に国際交流イベントが行われている。こうしたイベントの場においても、日系ブラジル人は「日系」ブラジル人ではなく、「ブラジル人」として紹介され、ブラジルの国を代表する人々と受け止められて

²⁰ 2017 年 3 月 7 日インタビュー

²¹ 以上、2017 年 12 月 10 日、2018 年 12 月 9 日フィールドノートより

いる²²。

他方で、Aさんを中心とする団体Xのメンバーたちによるブラジル文化の表象は、必ずしも押し付けられたものというだけではない。例えば、Aさんが紹介してくれた日系ブラジル人の活動の1つに、ブラジルのお菓子を作る工場がある。そこでは、小麦粉ではなくキャッサバの粉を使ったビスケットなどブラジルでもよく食べられているお菓子が作られている²³。そして、その工場を見学した際には、工場のオーナーからもAさんからも、それぞれのお菓子がどのようなものであるか説明をもらった。このような様子からは、こうしたブラジルのお菓子もかれらの文化の一部となりつつある様子が示唆される。

以上のことから、Aさんや彼の周りの日系ブラジル人がブラジル文化を前面に押し出すことは、必ずしもTsudaが指摘するような日本社会に対する抵抗というだけではない意味を持つことが見てとれる。それは、つまり、日本社会からの期待と上手く折り合いをつけるために、自分たちの「ブラジル人」的な部分をより強調するという、「受容」の語りと見ることもできる。Aさんたちが地域の国際交流イベントで自分たちに期待されている「ブラジル人」としての役割を理解し、それに合わせた文化紹介をすることは、ホスト社会からの期待に合わせたかれらの選択である。そこには、日本社会から自分たちに注がれる期待に合わせることで、自分たちに対する理解促進やネガティブな見方を少しでも変えたいというかれらの考えが反映されているだろう。したがって、Aさんがブラジル文化を表象することは、日本社会のなかの「日系ブラジル人＝ブラジル人」というマスター・ナラティブを「受容」した語りということができる。

3.4 考察

本節ではここまで見てきたAさんの語りをもとに、日系ブラジル人のエスニック移民としての側面が、かれらの日本社会における生活において意味するものを検討していく。2章において、Tsudaによる日系ブラジル人の日本社会への抵抗と同化の議論を紹介したが、Aさんの語りからは、Tsudaの議論とは異なる抵抗の形が明らかになった。Aさんは、Tsudaの議論の中心になっていた日系ブラジル人と同じような経験をしていると語っている。すなわち、ブラジル社会においては自分たちのことを「日本人」だと思って生活していたにもかかわらず、来日後には、国籍のうえでも「外国人」とされ、差別や不平等な扱いを受けたことを語っており、それはまさに“positive minority”から“negative minority”への変化といえる。このような経験をした人々はTsudaの議論にのっとれば、来日後にブラジル文化にもとづいた行動をすることで日本社会に対して抵抗することになる。しかし、彼の場合により強調されたのは、いかに自分が「日本人」であるか、正当な根拠を持って日本社会に存在している

²² 2017年12月10日、2018年12月9日に開催された飯田市内の国際交流イベントの参与観察フィールドノートより

²³ 2018年12月11日フィールドノートより

かを示すことによる抵抗であった。

では、なぜ、Aさんの語りは、Tsudaが論じたような形とは異なる抵抗の語りとなったのだろうか。1つには、日系人であるTsudaと「日本人」である筆者という聞き手の立場性の違いがあるだろう。Tsudaは、自らがブラジルに数カ月滞在していたことや日系アメリカ人であることをインフォーマントに明かし、かれらと同じようにして見つけた工場での労働を行いながら参与観察をし、ポルトガル語でコミュニケーションを取り、その工場での同僚たちを中心にインタビューを行っていたようで、かれらからも内部の人間として認識されていたと述べている（Tsuda 2003, 11-15）。他方で、Aさんと筆者の場合には、筆者が「日本人」の大学院生であることをAさんは理解しており、ポルトガル語もできなければ、ブラジルに行ったこともないことを知っていた。そのため、Aさんと筆者の間の日系ブラジル人と「日本人」という違いが、Aさんのなかで常に意識されていたと考えられる。すなわち、Tsudaの調査の場合には、ある種「仲間」同士のインタビューの場において、日本社会に対して異質性をアピールすることによる抵抗の語りが強く聞かれたのに対し、Aさんと「日本人」である筆者のインタビューにおいては、Aさんが「日本人性」を強く主張するという戦術をとった可能性が考えられる。聞き手だけではなく、調査時期も場所もインタビューも異なるため一概に論じることはできないが、少なくとも、Aさんの場合には、筆者を通して「日本人」や日本社会に対して語っていたと考えられる。そのなかで、彼が自分や他の日系ブラジル人の「日本人性」を主張することによって日本社会からのまなざしに抵抗し、自分たちの存在の正当性を語ることは、前述した通り、日本社会にかれらがエスニック移民として受け入れられたことと強く関係している。

もう1つの理由としては、Aさんが日系ブラジル人コミュニティのリーダー的な存在であることも関係しているだろう。Aさんは、インタビューのなかで、どうにかして日系ブラジル人に対する差別的な見方や不平等を改善しようと努めてきたことを語っている。それは、例えば、上述の、日系ブラジル人とブラジルに渡って成功した「日本人」は同じであるという語りにもあらわれている。Tsudaの指摘にもあるように、日系ブラジル人が抵抗の形として「ブラジル人」的な行動をすることは、日本社会からかれらに対する「ブラジル人」としての見方を変えることはできず、結果としてかれらの社会経済的地位の上昇にはつながらない（Tsuda 2003, 352-3）。日系ブラジル人の社会的な地位の上昇を目指すAさんにとって、このような結果は望ましいものではない。加えて、Aさんは、地域社会からも日系ブラジル人コミュニティと地域社会の橋渡し役となることを期待されている。そのため、日本社会に対してあまりにも反抗的な態度をとったり、そのような語りをしたりすることを避け、「日本人」のなかで受け入れられやすい「日本人性」を強調したと考えられる。つまり、自分たちが「日本人」的であることを示すことは、日系ブラジル人の地位向上の可能性を持つことと日本社会との良好な関係性の構築につながる点で、彼のコミュニティのリーダーとしての役割と橋渡し役としての役割にかなうものになる。

以上2点からは、Aさんの語りは、日本社会との関係性、特に良好な関係性の構築を強く意識した語りであることが指摘でき、そのことが Tsuda の議論とは異なる形の抵抗の語りを生み出したと考えられる。

さらに、Tsuda の議論においては、ブラジル・アイデンティティを持ちブラジル文化に沿った行動をする人々に対しては「抵抗」という分析がなされるが、日本社会に文化的に「同化」する人々に対しては、日本社会からの「同化圧力」に従おうとすることができずに苦しむ人々という描き方がされている。しかしながら、Aさんの事例からは、日本社会に対して自分たちの「日本人性」を主張することは、同化圧力にただ従うというものではなく、かれらの存在の正当性や根拠を主張して抵抗するという戦術の形を見ることができる。さらに、「ブラジル人性」の主張においても、それは日本社会からかれらに対する「ブラジル人」というまなざしを受け入れることで良好な関係を築こうという戦術と理解できる。すなわち、日本社会からの期待や圧力に抵抗することも、それを受容することも、日本社会と Aさんとの関係性のなかで作られた生活戦術であり、日本社会側の期待や圧力に沿った行動に見えるからといって、必ずしも、日本社会に従属的なわけではないことを指摘する必要がある。

4. おわりに——社会統合論への示唆

以上、Aさんの語りとその分析結果が示唆するのは、かれらを「ブラジル人」として見ているだけでは捉えることのできない社会統合をめぐるポリティクスが現場で起きているということである。Aさんの語りのなかでは、「日本人」、「日系人」としての「誇り」の語り、日本社会から日系ブラジル人へのまなざしに対する「抵抗」の語り、そして、日本社会からの期待の「受容」の語りが示されている。彼と彼の家族の移動経験と日本社会との関係性が複雑に交錯するなかで、戦術的に「日本人」らしい振る舞いをすることもあれば、「ブラジル人」らしい振る舞いをすることもあるし、「日本人」意識が高まることもあるし、「ブラジル人」意識が高まることもある。以上のように、本稿の事例からは、日系ブラジル人と地域社会の相互作用のなかで、従来「ブラジル人」とみなされてきた日系ブラジル人のなかの「日本人」的な側面が、日本社会との関係性のなかで意味を持っていることが指摘できる。したがって、日系ブラジル人は単に「ブラジル人」というだけではなく、「日本人」と「ブラジル人」の間に立つような存在であるといえる。そして、このことは、「日本人」と「ブラジル人」や「外国人」の間の境界が曖昧なものに過ぎないことを明確に示している。

さらに、本稿の分析からは、いわゆる「同化」と「多文化共生」も二項対立的なものではないことが浮き彫りになったと考える。Aさんの語りに見られた「日本人性」の主張と「ブラジル人性」の主張はそれぞれ、「日本人」への「同化」とブラジル・エスニシティの保持、つまり「多文化共生」において目指されるような多様性の保持ということもできる。しかしながら、ここまで見てきたように、「同化」も「多文化共生」も時と場合に応じて戦術的に使い分けられており、どちらか一方しか選択されないというわけではない。

「多文化共生」は、その登場以降、地方自治体における外国人住民関係施策のスローガンの位置づけを与えられ、総務省も、地方自治体が「多文化共生」社会を目指すための取り組みを行うことを推奨した（総務省 2006, 5）。こうしたことから、「多文化共生」は、日本社会における外国人住民受け入れのあるべき形、モデルのような位置づけになっている。確かに、総務省による「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」（総務省 2006, 5）という定義通りの意味を「多文化共生」が持っているのであれば、それは、目指すべき社会の形にもなりうるだろう。しかしながら、実際には、「多文化共生」は表面的な文化の問題ばかりに終始しており、社会経済的な問題に切り込むものではないという批判が頻繁におきている²⁴。つまり、「多文化共生」は、現状では、あるべき社会の形を示すモデルにはなりえていないし、その「あるべき形」そのものが明確になっていない。にもかかわらず、「多文化共生」社会という理想の形があるかのように、それをゴールに据えた議論が盛んに展開され、とにかく「多文化性」ばかりが追求される一方で、「多文化性」と対立する「同化」は批判の対象となってきた。

このような状況に対して、本稿で明らかになったような、戦術的な手段としての「多文化共生」と「同化」は、こうした二項対立的な議論を乗り越えるヒントを与えてくれるのではないだろうか。すなわち、疑う余地のないゴールとして設定されてきた「多文化共生」を、あくまでも手段にしかすぎないという位置づけに変えることで、あまりにも過熱しすぎているようにも見える多文化と単一文化をめぐる議論を落ち着かせ、より現実的な社会統合の形を模索することができるだろう。

【謝辞】

本稿執筆にあたっては、A さんには、インタビューに加え、日系ブラジル人の活動や飯田市内の案内をしていただき、快く調査にご協力いただいた。また、飯田市役所の多文化共生ご担当者や飯田国際交流推進協会、飯田市公民館、団体 X をはじめ、ここには記しきれない多くの方にご協力をいただいた。この場を借りてお礼申し上げます。

また、本稿は、以下の助成を受けて行った調査をもとにしている。JSPS 科研費 JP25245060、平成 28 年度上智大学グローバル・スタディーズ研究科国際関係論専攻調査研究助成金、2017 年度上智大学若手研究者研究活動助成プログラム、2018 年度グローバル・スタディーズ研究科研究助成金。

²⁴ このことは、日本では、food、festival、fashion の頭文字をとって 3F と呼ばれ（竹沢 2011, 5）、欧米では、cosmetic multiculturalism と呼ばれている（Morris-Suzuki 2002, 171）。

【参考文献】

- 蘭信三. 2009. 「課題としての中国残留日本人」 蘭信三 (編) 『中国残留日本人という経験——「満洲」と日本を問い続けて』 勉誠出版: (17) - (70).
- Cohen, Robin. 2008. *Global Diasporas: An Introduction 2nd Edition*. London and New York: Routledge (=駒井洋. 2012. 『新版グローバル・ディアスポラ』 明石書店.) .
- 樋口直人. 2010. 「経済危機と在日ブラジル人——何が大量失業・帰国をもたらしたのか」 『大原社会問題研究所雑誌』 622: 50-66.
- 広田康生. 2003. 『エスニシティと都市〔新版〕』 有信堂高文社.
- 移民八〇年史編纂委員会. 1991. 『ブラジル日本移民八〇年史 (1)』, (取得日 2019 年 9 月 30 日, <http://www.brasilimbunko.com.br/Obras/26.pdf>).
- 石川良子・西倉実季. 2015. 「ライフストーリー研究に何ができるか」 桜井厚・石川良子 (編) 『ライフストーリー研究に何ができるか——対話的構築主義の批判的継承』 新曜社.
- JICA 駒ヶ根. 2008. 「ブラジル日系人演劇『虹の子』好演!! ——“国や文化が違っても人の心は同じ”」 『信州発国際協力』 22: 1 (取得日 2019 年 9 月 30 日 https://www.jica.go.jp/komagane/office/pdf/pr_22.pdf).
- Joppke, Christian. 2005. *Selecting by Origin: Ethnic Migration in the Liberal State*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- 梶田孝道・丹野清人・樋口直人. 2005. 『顔の見えない定住化——日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』 名古屋大学出版会.
- 小嶋茂. 2005. 「日系人からの脱皮——新しいアイデンティティとしてのニッケイ」 『アジア遊学 アジア日本・日系ラテンアメリカ——日系社会の経験から学ぶ』 76: 101-8.
- 近藤敦. 2017. 「複数国籍の現状と課題」 『法学セミナー』 62 (3): 1-4.
- 三田千代子. 2009. 『「出稼ぎ」から「デカセギ」へ——ブラジル移民一〇〇年にみる人と文化のダイナミズム』 不二出版.
- Morris-Suzuki, Tessa. 2002. *Immigration and Citizenship in Contemporary Japan, Japan - Continuity and Change*, Javed Maswood, Jeffrey Graham and Hideaki Miyajima eds., London: Routledge Curzon: 163-78.
- 日系人相談センター. 2019. 「よくよせられる相談——査証・在留資格」 公益財団法人海外日系人協会ホームページ (取得日 2019 年 9 月 30 日 <http://www.jadesas.or.jp/consulta/01-05consulta.html>).
- 岡田玄・鬼原民幸. 2018. 「日系 4 世ビザ、発給 2 件 家族帯同ダメ・30 歳以下・・・厳しい条件」 『朝日新聞』 2018 年 10 月 28 日朝刊.
- Roth, Joshua, Hotaka. 2003. *Urashima Taro's Ambiguating Practices: The Significance of Overseas Voting Rights for Elderly Japanese Migrants to Brazil, Searching for Home Abroad: Japanese Brazilians and Transnationalism*, Jeffrey Lesser. Durham ed., N.C., London: Duke University

Press: 103–20.

- 桜井厚. 2002. 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- . 小林多寿子. 2005. 『ライフストーリー・インタビュー——質的研究入門』せりか書房.
- 総務省. 2006. 『多文化共生の推進に関する研究会報告書』(取得日 2019年7月15日 http://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b5.pdf).
- 竹沢泰子. 2011. 「移民研究から多文化共生を考える」日本移民学会(編)『日本移民学会創設20周年記念論文集 移民研究と多文化共生』御茶の水書房: 1-17.
- Tsuda, Takeyuki. 2003. *Strangers in the Ethnic Homeland: Japanese Brazilian Return Migration in Transnational Perspective*. New York: Columbia University Press.
- . 2009. Introduction: Diasporic Return and Migration Studies, *Diasporic Homecomings: Ethnic Return Migration in Comparative Perspective*, Tsuda Takeyuki ed., Stanford, California: Stanford University Press: 1-18.
- 都築くるみ. 1998. 「エスニック・コミュニティの形成と『共生』——豊田市H団地の近年の展開から」『日本都市社会学会年報』16: 89-102.
- . 2009a. 「公営住宅の日本人から見た外国人」小内透(編)『調査と社会理論 研究報告書27——地域生活における外国人と日本人の関係』: 31-42.
- . 2009b. 「日系ブラジル人の生活と日本人との交流——県営A団地で生活する人々を事例に」小内透(編)『調査と社会理論 研究報告書27——地域生活における外国人と日本人の関係』: 63-83.
- 山本かほり. 2010. 「『多文化共生施策』が見落としてきたもの——経済不況下におけるブラジル人」『海外移住資料館研究紀要』5: 33-44.
- 山脇啓造. 2009. 「多文化共生社会の形成に向けて」『移民政策研究』1: 30-41.

Examination of Social Integration of Migrants through Ethnic Migrants
: Between “Japanese” and “Foreigner”

Yui Ibuki

Abstract

This article attempts to reconsider the social integration of immigrants to Japanese society through analysing the Japanese Brazilians from the viewpoint of ethnic migrants. Most of the previous studies on the Japanese Brazilians see them as “Brazilians”. However, analysing them from the views of multi-layered ethnicity and continuity of movements enable us to discover the following types of narratives: “pride” as “Japanese”, “resistance” against Japanese society by claiming their

“Japaneseness”, and “acceptance” of expectation from the Japanese society. These narratives show their “Japaneseness” and “Brazilianness” are used as tactical means. By the examination of a Japanese Brazilian case, this article suggests that it could be effective to treat “tabunka kyosei (multicultural co-existence)” as means, not as a goal to be achieved so that we can discuss social integration without only talking about cultural issues.

Keywords: ethnic migrants, Japanese Brazilians, social integration, survival tactics, means